

日々新た、子供と共に

3月、各地で卒業式が行われている。人生の新たな旅立ちの卒業式、卒業生を送る教職員の目には、自然と涙があふれ出てくる。特に、担任教師には、様々な思いがある。子供たちと共に過ごした学校生活、一生懸命やればやるほど、その涙の味は濃い。

自身の担任時代を振り返ると、日々の学級経営、常に“日々新た”という気持ちを大切に子供たちと接してきたように思う。子供たちが下校した後、机・椅子を整頓し、ほうきで簡単に床をはく。教室の状態を見ていると、その日の子供たちの心の在りようが見えてくる。「風邪気味だったA君、明日は来れるかな?」「今日、叱ったB君、分かってくれたかな?」など、一日を振り返る。退校時には、再度、教室に行き、カーテンをしめて帰る。長い休み明けの前日には、「おはようございます。今日から新学期が始まります。元気で頑張りましょう。」「明けまして おめでとう。最高学年になる年だ。新しい目当てをもって頑張りよう。」などと黒板に書いて、子供たちを迎える。子供たちが、いつも新たな気持ちでスタートできることを願って……。

給食時は、グループの中に入って子供たちと話し、掃除は一緒にほうきではいたり、机を運んだりした。休み時間は、ドッジボールやキャッチボール、縄跳びをして遊ぶなど、できるだけ子供たちの中にいることを心掛けた。何気ない会話やしぐさの中から子供たちの本音が聞こえ、素顔が見えてくる。かつて、先輩教師から言われたこと、「どの子にも一日に一回は、声掛けをしよう。」「子供を叱った後は、必ずフォローし、悲しい思いをもち帰らせない。」を常に心がけた。そんな中で、子供たちとの一体感が徐々に深まっていくのを感じた。

「確かな学力の定着」「豊かな心の育成」などが強調される昨今であるが、究極は、日々の学級経営にかかってくるものだと思う。常に子供と共に在り、子供の声に敏感でありたい。そして、子供たちが、いつも明るく元気で、“学校が楽しい”といえる学級づくりを目指したいものである。